№110　2009.03.31

＊ポレーシェとは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう

チェルノブイリデー’09

～菜の花がひらくチェルノブイリの未来～

〈2008 ｺﾗﾎﾞﾌｪｽのひとこま。
『ﾁｪﾙﾉﾌﾞｲﾘﾃﾞｰ’09』も頑張ります！〉

2009 年 4 月 26 日、チェルノブイリ原発事故から 23 年目のこの日、チェルノブイリ救援・中部は、あるイベントを行います！
その名も『**チェルノブイリデー’09**』！

当日、会場である**「名古屋働く人の家」**では、いろいろな企画を行います。

メインの企画は、やはり**「菜の花プロジェクト」**。ウクライナでは、そのプロジェクトの中で、菜の花からできたナタネでバイオディーゼル燃料を作りますが、今回のイベントでは、現地で使っている機械と同じものを使って、廃油を原料にした**「燃料の精製実演」**を行います！　そしてその機械を、なんとはるばる山形県から、開発者である MSD の武田社長に運んできていただきます。なかなか見ることのできない現地での活動の一部始終を、間近で見てみませんか？　きっと、新しい発見がありますよ！

そのほかにも、これまで地道にためてきたウクライナの写真を展示した**「ナロジチ写真展」**や、現地でのプロジェクトなどを撮影した**「DVD の上映」**、また毎年恒例の**「クリスマスカードキャンペーンやミルクキャンペーンのご紹介」**と、今年の報告などを行います。そしてなんと、当日は**「ウクライナの家庭料理であるボルシチ」**を、日本にいながらにして楽しんでいただくこともできます。

23 年目の祈念日だからこそ、これからのウクライナや私たちにできる事とは何なのかについて、みなさんと一緒に考えていきたいと思います。

そして、いまだに続く被災によって不安だらけのチェルノブイリの未来を、子どもの明るい笑い声がたえない未来にするために、ご協力いただきたいのです。

たくさんの皆さまのご来場、こころよりお待ちしております！

（詳しくは、次ページを参照してください。）

（黒瀬愛見）

〒466－0822　名古屋市昭和区楽園町 137　1－10
チェルノブイリ救援・中部　　代表：小牧　崇
郵　便　振　替：00880－7－108610
ＴＥＬ／ＦＡＸ：052－836－1073（月･水･金 10:00 ～ 17:00）
ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

チェルノブイリデー'09（イベントのご案内）

日にち：2009 年 4 月 26 日（日）
時　間：10:00～16:30
場　所：名古屋働く人の家
　　地下鉄「名城線伝馬町③番出口」
　　徒歩５分

10:00～　開会式＆基調講演
　　“チェルノブイリ原発事故について”
　　講演者：河田 昌東
10:30～　バイオディーゼル燃料（以下 BDF）精製開始＆講演会
　　“ウクライナ被災地での BDF 精製にたずさわって”
　　講演者：株式会社エムエスデー　武田 章社長
11:00～　DVD 上映；ウクライナ・ナロジチ写真展；当会の活動紹介；ウクライナ料理
13:30～　講演会：**“チェルノブイリ原発事故から 23 年を迎えて”** 講演者：河田 昌東
15:00～　BDF 精製完了＆講演会
　　“バイオディーゼルとウクライナ土壌再生のこれから”
　　講演者：株式会社エムエスデー　武田 章社長
16:00～　閉会式

バイオディーゼル燃料製造装置のデモンストレーション

昨年９月にウクライナ・ナロジチへ運んだ“バイオディーゼル燃料製造装置”と同じ装置を会場に運び、実際に実演し廃油を精製します。なんと、バイオディーゼル燃料製造装置を積んだトラックは４トン車！

ウクライナ・ナロジチ写真展

これまで派遣団がウクライナで撮影した、現地の人々や風景・建物などの写真を展示します。

団体の活動紹介

現在行っている活動やこれまでの活動の歴史を、パネル形式で紹介。２月にウクライナの子ども達から届いたばかりのクリスマスカードを展示します。とても色が鮮やかで元気の出るカードです。

DVD 上映

バイオディーゼル燃料装置がナロジチで稼動するまでの村の人々とのやりとりや、バイオディーゼル燃料装置を保管する小屋の修繕作業など、現地に実際に行ったかのように感じるビデオの上映を行います。

ウクライナ料理

ウクライナの家庭料理のひとつ“ボルシチ”を試食していただけます。ボルシチとは煮込みスープの一種で、たくさんの野菜と“ビーツ”という赤かぶに似た食材を入れる事により、スープが赤くなるのが特徴です。（材料費がかかります。）

スタンプラリー

会場内に展示してある写真やパネル、講演を聞いてスタンプラリーに挑戦!!　参加者には、お楽しみプレゼントがあります!!

民芸品販売

ウクライナの民芸品「マトリョーシカ」や、木のお皿に現地の風景が描かれた壁掛けや、刺繍の壁掛けなどを販売します。

★ワクワクするような企画を、たくさんご用意してお待ちしております。是非ご来場ください!!

（山本梨恵）

市民フェスタ「つながるいのち」～被曝した子どもたちの願いに応えるために～

あの日から 23 年、広河隆一さんは今チェルノブイリ取材中ですが、「チェルノブイリはもう変わらない。写真に撮るような変化はない」と言う人がいます。死の街、埋葬された街。そうかもしれません。しかし、今なおそこに生き続ける人たちがいます。世代を超えてのチェルノブイリの証人たち。固有名詞で知り合った彼らのことが、いつも脳裏を離れません。

だから、背伸びしているな…と自覚しつつ、今年も企画してしまいました。暮らしがひとしお厳しい時代にはなったけれど、それでも、全国あちこちに「4.26」を意識して背伸びする人たちがいて、名古屋周辺にも 70 歳のばあさんに共感し、協働を約束してくれる友らがいて･･･4 月 29 日に向けて動き出しました。コンセプトは、有名人に依拠するのでなく、「**市民で作るいのちの輪**」。最初に集まったとき一人が提案した「**つながるいのち**」というキャッチコピーにみんなが同感して･･･稚拙かもしれないけれど、みんなで作ります。幼い人たちも、チェルノブイリのお友達に思いを馳せて踊ってくれます。**アレクシエーヴィチさんの「祈り」**も聴きます。

若い人たち手作りのパネルも展示します。非核・脱原発の明日を目指して、チェルノブイリの悲しみと、日本の現実を合わせて並べたいのです。そのことが、「私たちのような子どもを、もうこれ以上作らないで!!」と、覚えたての日本語で訴えた彼らの願いに応える、ただ一つのすべだと思うから。「これ以上繰り返してはいけない。汚染地で病気と闘う彼らの心のためにも」…その思いひとしおの今年の企画です。**同封のチラシをご覧の上、どうぞお誘いあわせてお越しください。そして、あなたの「いのちの輪」もつなげてください。**　（宮西）

★「戦争は女の顔をしていない（群像社：2,000 円/冊）」★
スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ著（三浦みどり訳）
「…女も戦った。男に混じって戦った。でも勝利は男だけのもの…」
皆さんは、もう読みましたか？　当日、会場で販売いたします。（美）

「10.3 原子力政策の転換にむけた全国集会（仮称）」の立ち上げ会議に参加して（橋本）

２月 14 日（土）、渋谷区の千駄ヶ谷区民会館には、さほど広くない部屋にぎっしりの人。7～80 人は集ったでしょうか。六ヶ所から、柏崎から。他にどこからみえたのかわかりませんが、全国から参加者が集いました。反・脱原発の全国集会で思い出すのは、過去２回。1988 年の日比谷公園での２万人集会と 2003 年の代々木公園での５千人集会。そして 2009 年（今回）、明治公園のキャパシティは一万人とのこと。なんとしても前回を下回らないことです。

呼びかけ人の一人、小木曽美和子さんによる「**核燃サイクルが動き出そうとするこの年にこそ、それを止める運動を盛り上げましょう。成功に向けてぜひ力を貸してください**」という挨拶で開会し、資料として出された「こんな集会にしたい」をたたき台として、意見を出し合いました。

・次世代の人に来てもらえるように、集会ではなくイベント色の強いものに。
・ステージで出し物的な企画を行うよりも、「しゃべり場」を作ろう。
・地方から代表者を呼ぶだけではなく、地方の現状をブースごとに積極的に見せる工夫を。
・燃料電池・太陽光発電などのメーカーとタイアップし、自然エネルギーを実感できるブースを。
・芸術家の作品を展示して、「芸術が地球を救う」といった切り口で、感覚に訴える。
・集会の前日は、総評会館で屋内企画が開催できる。
・当日は、２コースに分かれてデモ行進をする。

集会の名称については、意見が続出、時間内で意見がまとまらず、集会後の企画運営委員会で

「10･3 NO NUKES FESTA 2009 ～放射能を出さないエネルギーへ～」に決定しました。

3,824 千円！　ボラ貯　配分決定!!　（神谷）

2008 年 8、9 月に、「ナロジチ再生菜の花 PJ」3 年目に向けて、「イオン財団」と「郵便貯金・簡易生命保険管理機構（国際ボランティア貯金寄付金）」へ、助成金の申請を行いました。

イオン財団からは、12 月下旬に助成配分から外れた旨の連絡を受け、2009 年度の予算案を組むに当り、厳しい現実に直面しました。3 年目は、BDF を本格的に稼動し、菜種栽培用やスクールバス用のディーゼル油の生産を、そしてミニバイオガス装置の製作をしなければなりません。

また、従来からの地区病院への医薬品援助、被災者団体への医薬品援助・粉ミルク援助・奨学金援助の継続を、当然行わなければなりません。「ボランティア貯金寄付金」を、祈るような気持ちで待っていたところ、3 月に入り直ぐに、「配分決定通知」が届きました。

配分内容は

① **2 回のスタッフ・専門家派遣費用**（1 回目はミニバイオガス装置製作と BDF 装置点検を実施。2 回目は、BDF・BG 進捗状況確認、カウンターパートの予算実行状況の確認、新年度事業計画の打合せを実施。）

② **住民参画の体制作り**（BDF・BG の住民理解を深め、菜種栽培拡大の啓蒙活動、国連開発機構（UNDP）の協力要請もして行く。）

③ **菜種栽培関連費**（栽培作業費、種子費、肥料・農薬費、栽培担当者手当）

以上 3 項目で、総額 3,824 千円です。

今回の配分決定で、3 年目に向けての弾みと勇気が出てきました。ミニバイオガス装置製作場所は、3 月中には決定し、4 月下旬の派遣出発に向け、既に準備に入っています。しかし、土壌分析・放射能測定検査費、バイオディーゼル油製造費は申請が却下され、自己資金でまかなわなければなりません。従来からの医薬品支援や粉ミルク支援の継続、本格的バイオガス装置の製作と、まだまだ資金的は厳しい状況です。

引き続き皆様の暖かいカンパをお願いいたします。皆様の善意に応えられるよう、私たちも全力を出して走り続けます。

＜ｱﾙｼｭの支援を受けて届けられた自転車（ﾉﾘﾝｯｨ地域家庭病院にて）＞

「アルシュオープンオフィス」に参加して　（神谷）

2 月 21 日、「NPO 法人アルシュ」の「オープンオフィス」が開催されました。アルシュ（自立を支援する会）は 2003 年に設立され、名古屋市瑞穂区に事務所を構え、国内外の貧しい人々や困っている人々に必要な物資を、各 NGO 団体を通じて支援する活動を行っている NPO です。私たちチェル救も、2006 年の「第 1 回かけはし支援基金」で、支援品船便輸送費援助として「10 万円の助成金・12 台の中古車椅子」を、2008 年には、「12 台の中古自転車・多数の作業服（上下）の援助品」を受け、ウクライナへ送っています。　当日は、30 名ほどの参加者で事務所は賑わっていました。最初に「第 4 回かけはし支援基金」の贈呈式があり、4 団体に助成の交付書が授与され、各団体からの謝辞が述べられました。

チェル救からは、今までの援助に対する感謝と、「2008 年の作業服は、ナロジチ再生菜の花 PJ の作業で役立っています。また、中古自転車は、各村の診療所に配り、往診等に役立ち喜ばれています。」と報告させていただきました。事務所を見回すと、各団体から報告された「援助品を現地に渡している写真や喜んで利用している写真を添えた感謝状」が壁に張り巡らされていました。チェル救も、その都度事務局からお礼と報告の連絡は入れているのですが、今回は、連絡の行き違いもあり未提出でした。やはり、援助品が喜ばれ有効に利用されていることを、写真を添えて報告する必要性を痛感しながら退席しました。その後、駐在員竹内さんにより現地診療所で利用されている自転車が撮影され、アルシュさんへ報告することができました。

今回の反省を糧にして、今後の援助に役立てていきたいと思います。

＜帰国報告・カードキャンペーン最終報告＞　（黒瀬愛見）

突然ですが先日、名古屋 NGO センター主催の**「NGO スタッフになりたい人のためのコミュニティーカレッジ（通称：N たま）」**の海外研修で、エチオピアへ行ってきました！10 日間ほどの研修で、日本国際飢餓対策機構にお世話になりながら、都会と田舎の様々なプロジェクトを見させていただきました。短い期間でしたが、学ぶことは多くありました。その中でも、私が「はっ！」としたことがあります。「幸せの価値観」についてです。モノに溢れた日本から見れば、エチオピアの人々は貧しくて「かわいそう」に見えてしまう。でも、それは違いました。不思議なことに、モノがない田舎の子ほど、こちらに満面の笑みで手を振ってくれるのです。確かに慢性的な食糧不足はあります。しかし、それでも興味津々に笑顔で寄ってきてくれるのです。モノやお金ではないのですね。そしてこの研修では、なにより、その誤った「価値観」が自分の中にあったことにショックを受けました。いままで無意識のうちに築きあげてきた「幸せの価値観」が、どんなにもろいものであったかを痛感しました。私にとって、とてもいい経験、自分を見つめなおす機会となりました。

さて、**クリスマスカード・キャンペーン**の最終報告をお伝えします。

先月、ウクライナから 155 枚ものお礼のカードが送られてきました。皆さんの温かいご協力への、精一杯の感謝の気持ちだと思います。そして、カードを書いていただいた皆さんへ、このカードを送らせていただきました。**それぞれが、世界に 1 枚しかない、お互いの想いがつまったカードです。**このような温かい交流が、次のこのキャンペーンを行う原動力になればと思います。

ウクライナで、あなたのカードを待っている子どもがいることを胸に、今年のクリスマスカード・キャンペーンにもご協力いただけますよう、心からお待ちしております。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「企業と NGO の『Win－Win』関係の協働をめざして」に参加して　（山盛）

３月 18 日、あいち国際プラザにて愛知国際協力セミナーが開催され、NGO10 団体、20 人の企業関係者、JICA・行政関係者等の参加があった。「企業の社会的責任（CSR）」について関心の高い企業は、地球環境問題へのアプローチや、取引先国・地域等での国際的支援・協力を展開している。そのような活動に関心のある企業と NGO との、協働・連携のためのセミナーである。㈱デンソーは、障がい者福祉・青少年育成・環境共生分野での国内外での活動紹介と、NPO「アジア車椅子交流センター」の活動について、また、㈱INAX はベトナムにおける「水環境の保全」教育の取り組みについて講演した。また、(特)アジア日本相互交流センターと SPP㈱双方による協働事業の事例「フィリピン最大のごみ処分場で働く人々への自立支援として行っているフェアトレード事業」についても報告された。

一方、参加した NGO はそれぞれブースを出し、どんな企業と出会えるのか･･･と、楽しみにしていたが、残念ながらブースを「訪問」する企業は少なかった。チェル救ブースには、愛知県職員の方が見え、菜の花プロについて質問されたが、企業の方はついに見えず。最後に、帰りかけた企業の方に、こちらからせめて名刺と資料を･･･と差し出したが、じっくり双方が語り合えるような場ではなかったことが残念。

名古屋 NGO センターがご苦労されたわりには、企業側の発表会的なセミナーといった感ありで、正直、実りの少ない企画となってしまった。ただ、企業と NGO の協働パターンの可能性についての問題意識は大切であり、今後もこのような企画は必要だと思う。もう一工夫というところか。

特集!! ２月訪問団報告

独・ユーンデ村／ウクライナ・ナロジチ地区／バイオガス訪問記（原 富男）

２月４日から 16 日まで、ドイツとウクライナを訪問しました。ウクライナへの経由地をドイツにしたのは、今後ウクライナ･ナロジチ地区において作ることになる**バイオガス発生装置の勉強**のため、バイオガスの先進地であるユーンデ村を視察することにしたからでした。

遠藤・河田・原の３人は、フランクフルトから急行に２時間ほど乗って、ゲッチンゲンに到着。タクシーに乗って 15 分、ユーンデ村に到着しました。ユーンデ村は緩い丘の中にあるのどかな村でした。その風景は、いつか絵で見たような懐かしさもありました。丘の中腹の平らな場所に、バイオガスの醗酵槽の円柱形ドーム（写真）が二つありました。

ユーンデ村のバイオガス施設は、ゲッチンゲン大学が計画を作り、2006 年から運転を開始したそうです。第一醗酵槽は 5,200 ㎥、第二醗酵槽は 3,000 ㎥。原料は、カラスムギ系の交配種と醗酵トウモロコシ、その他のバイオマスと牛の糞尿です。

バイオガスはすべて発電に使われ、全量電力会社に売電（年間 450 万 kw）し、年間 76 万ユーロ（1 億円）を売り上げています。醗酵槽で発生したバイオガスは、施設内の発電機で電気を作っていました。この発電時の熱が大事なエネルギーで、廃熱を回収してお湯を沸かし、温水は村の人口 720 人（142 戸プラス 50 戸）に配給され、各戸に備え付けられた熱交換器により、暖房・温水として使われているそうです。装置の管理は、すべてコンピュータ制御され、通常一人で管理しているそうです。醗酵槽から出る排出液は、良質な液体肥料として役立ち、農家が自分で取りに来ます。以前あった、家畜糞尿の衛生面での問題や悪臭などの問題も、解決することができたということです。

バイオガス後進国（ニッポン）からきた私は、理想を実現するドイツ人の実行力に驚きました。日本でもできるはずのバイオガス施設が、今の日本ではできていない。それは、技術力とか経済力ではない「考え方」とか「方向性」、つまりは「政治力」の問題だと思いました。しかし一方で、大規模かつコンピュータ制御されるバイオガス装置について、違和感を覚えたのも事実です。完璧にバイオガスが生活に使われている現実が、目の前にあるにもかかわらず、違う星のでき事のように思われ、居心地が悪い。それは、この施設に「手づくり感覚や生活感がない」からだと思います。徹底的に無駄を省く姿勢は、問題があるとも感じました。

僕個人の持っているバイオガスの理想的イメージは、もっと小さな手作り風なものなので、ユーンデ村のバイオガスは、規模・実行力・技術力とも「スゲー！」と思うけれど、「ちがう！」とも思います。良くも悪くも、ドイツ人の徹底した合理主義が、世界最新のユーンデ村バイオガス施設を生みだし、一つのモデルとなった現実を認めないわけにはいきません。しかし、僕自身の好みは別として、ユーンデ村のバイオガスは、私達の「菜の花プロジェクト」の最終的な目的にかなった規模と内容を持っているのです。

広大な汚染地域の土壌浄化のためには、このような大型装置が必要でしょう。しかし、それは私達がやれる規模ではなく、ウクライナ国家が行うべきこと。ウクライナが、国としてユーンデ村規模のバイオガス施設を作るまで、僕は小さな装置をナロジチに作り続けたいと思います。

ウクライナでは、気候条件や経済状況から、これまでバイオガスは普及していません。この普

及のために、力を尽くしたいと思います。

別天地ドイツを後にして、2月9日、ウクライナ･ナロジチに着きました。ナロジチでの第一の目的は、ミニバイオガス（8 ㎥）の設置場所を決めることでした。しかし現地側は、これまで何度も説明してきたにもかかわらず、大きな装置をイメージしていました。候補地として 250 頭の牛を飼っている農家に設置することを考えていたようで、再度こちらの意図を説明しなければなりませんでした。そのようなわけで、残念ながら滞在中に設置場所を決めることができませんでした。

帰国後、ディードゥフ氏とドンチェヴァ氏そして竹内さんが、再度ナロジチを訪問し、設置場所が決まりました。その場所は、ナロジチ地域のラスキ村（人口 600 人）の農業企業体（旧コルホーズ）用地で、発生したガスは道路を隔てた企業体事務所で使うことができる。工事に伴う地下水の湧き水に悩まされることもなさそうで、原料となる牛糞やバイオマスなども手に入りやすい。企業体自体で牛 50 頭・豚 30 頭・羊 15 頭を飼っている。ガスというと尻込みする人の多い中で、農業企業体長のベロノーシク氏は、バイオガス導入に積極的とのこと。また、工事期間中の宿泊滞在や食事が近くでできるというのも、工事をするものとしては助かることです。

設置場所は、できれば BDF 装置のあるステーションの近くのセレツ村が見回りやすく一番の候補でしたが、バイオガスの場合「生き物＝メタン菌」が相手なので、面倒見の良い人がいることが第一条件です。そのような事情から、ラスキ村に決めました。

現在、工事に伴う重機や資材などについて、現地に問い合わせ中です。準備が整い次第、工事に取り掛かることになります。ミニバイオガスと工事は、見本装置であるとともに、掘削から資材調達・人足・宿泊など、来年予定されている大きなバイオガス装置の工事の、予行演習にもなる取り組みです。条件が整い次第、工事を開始します。**規模はユーンデ村（8,200 ㎥）の千分の一（8 ㎥）ですが、普及のための第一歩、頑張ります!!**

ナロジチで研究報告会　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

２月 11 日、ナロジチ町文化会館で、これまでのプロジェクトの成果についての「第２回報告会」が行われた。議会関係者や病院長・消防署関係者・新聞記者など、約 60 名が集まった。初めに立ったサブリュク行政長の長すぎる演説にはいささか辟易したが、彼の話は「ウクライナのエネルギー危機にあたり、政府が 20%の節電をせよ、と号令をかけているのだから、町民も努力すべきだ」ということだったようだ。

次に、**農業大学のディードゥフ助教授が、ウクライナのバイオエネルギーの可能性について話し、菜の花プロジェクトの意義を説いた。そして、栽培した菜種の様々な分析結果について、パワーポイントで説明した。**現地では「菜種栽培は土壌を疲弊させる」と言い伝えられているが、やってみるとそうではないことや、放射能の分布などについて、やさしく解説した。彼は、我々の考えを最もよく理解している、現地側の中心人物である。**ディードゥフ助教授には、今年 8 月来日していただき、各地で講演会を行う予定である。**事前の打ち合わせに従い、その後をうけて私の方から**昨年ナロジチで行ったバイオディーゼル燃料（BDF）の製造の様子を写真で紹介した。彼等にとって、BDF の製造や、それで発電機やトラックが動く様を見るのはもちろん初めてであり、何人かは身を乗り出して見入っていたのが印象に残った。**

今後もこうした現地報告を続け、住民の理解を深めることが大切である。　（河田）

ナロジチにおけるバイオガスの展望と日本の自然エネルギー　（富士見町 遠藤雄二）

ナロジチには広大な農地があり、植物バイオマスを作る事ができる。また、各農家には数頭の家畜がいて、小規模のバイオガスプラントを作るには恵まれた条件が揃っている。しかし、いろいろと問題点もある。まず、冬の天候。北緯 50 度の位置にあり、冬の気温の低さと、今回数日しか現地に滞在しなかったが、青空を見ることはなく、聞く所によると冬はかなり天候が悪いとの事。

バイオガス槽を地下に作るとしても、槽内は 20℃以上にしなければならないので、冬期の加温はかなりのエネルギーが必要となるが、太陽光はあてにできない。また、夏は家畜を放牧する為、家畜の糞の利用が難しくなる。更に、今回の短い滞在中にも、数ヶ所で馬車に積んだ家畜の堆肥を畑にまいている光景を見る事があった。長年やってきたこのような習慣を変える事も、難しいのではないかなどと考えているが、解決する事は十分可能と思われる。

ナロジチのバイオガスの事を思い描きながら、日本の自然エネルギーを考えてみた。

ナロジチの人々から比べると、我々日本人は無限大にエネルギー（化石燃料・原子力）を消費している。また、毎年数千万トンの食料・穀物を輸入し、食料に至っては食べる分の 2 倍近く（1,900 万トン）をごみとして廃棄している。その多くは石油を使って燃やし、自然エネルギーに関しては、ほんのわずかしか開発されていない。このような日本に暮らしていて、「ナロジチに自然エネルギー」とは少々はずかしい思いである。しかし、このような愚痴をこぼしていても、なんの解決にもならない。自分のできる事をやることである。

わが家では、暖房と給湯は 100%木質バイオマス（ただの薪）でやっているし、昨年作ったバイオガストイレも、今年中には完成させたいと思っている。そして、是非ともナロジチにバイオガスプラントを成功させたい。

「ＮＧＯ能力強化支援制度説明会」（名古屋）　（戸村京子）

去る２月 10 日、中村区の COMBi 本陣にて、外務省・JICA 地球ひろば等の主催（名古屋 NGO センター協力）による「NGO 能力強化支援制度説明会」が開催されました。JICA 地球ひろばの人材育成プログラムやアドバイザー派遣制度、外務省の NGO 長期スタディ･プログラムなど、NGO の人材育成・能力強化のための支援制度の説明と、実際に制度を利用した団体の事例報告がありました。

名古屋 NGO センターの加盟団体である **NPO ソムニード(高山市)の、会計のあり方の改善に対する公認会計士のサポート**や、同じく**財団法人アジア保健研修所・AHI（日進市）のアドバイザー派遣制度を利用したスリランカでの調査**などが報告され、団体の組織強化に役立ったということです。また **NGO 長期スタディ・プログラムを利用してタイで研修した、NGO スタッフの体験報告**もありました。

NGO の活動はボランティア活動といえども、現地調査やプロジェクト･マネジメントなどの現地での活動や、ファンドレイジングや会計処理、アドボカシー･説明責任などにおいて、高い専門性が求められます。NGO 活動を支えていただく支援者や公的･民間の助成金など、貴重な資金を有効に使うためにも、NGO は高い能力や専門性、責任を求められる時代となり、そのために団体や個人の能力を磨き、研鑽に勤めなければならないといえます。

チェル救でもこれらの制度を利用し、組織強化を図り、有効な支援が行えるように努力していきたいと思います。「ナロジチ再生　菜の花プロジェクト」では、実験研究のほか、BDF 製造装置・BG 装置の建設など、バイオエネルギーのハード面の支援は進行中ですが、そのソフトといえる利用面でのシステム作りは、これからの大きな課題です。バイオエネルギーを、被災住民の生活向上のために生かす方法、住民の方々への協力法を探るなどの分野で、この支援制度を利用できないものかと思案中です。

菜の花便り　ぼやき編　（榎本）

また、春が巡ってきました。あちこちを散歩するたびに、菜の花を見かけます。

もうじき、ナロジチにも春が訪れることでしょう。しかし、花は咲き、種は収穫され、そのディーゼルオイルで車が動く、そして土壌の放射能の濃度は、実験とはいえ下がるであろうことが証明されても、現地の人々への刺激にはならないのかしら？　肥沃な土地での農業の記憶は、まだ人々の中にあるはずなのに。23 年という歳月は、人々を疲れさせてしまったのでしょうか？

菜の花プロジェクトを進める上で、彼らには「自発的な協同」という言葉はないのでしょうかね。それは、こちらの都合のいい要求かしら。いつまで続けられるかわからない物資の支援から、「放射能濃度の高い作物の摂取」→「体内被曝」→「働けない」→「貧困」という、今も続く負のサイクルから抜け出すための新たな支援、「土壌浄化」→「労働」→「エネルギーの自給」を目指す自立のための技術移転に、みんな自分たちで考え動かなくてはいけないと気がついて、戸惑ってしまったのでしょう。

23 年経った今でも、事故があったことさえ知らない子ども達に現れる放射能被害。これを止めることは、大人たちが今果たさなければならない責任であることは明確なのに。事務局では、あとちょっと息の合わない現地との調整に、苦労が絶えません。また、自分の仕事や体調を調整し、重ねて現地を訪れる原さんの苦渋たるやいかに。

ネガティブになってしまいましたが、悩めるチェル救には、適材適所と言うべく人が現れて、適切なアドバイスや仕事を果たしてくれています。そのような人がナロジチにも増えて、人々に希望を与えてくれるようになるのは夢なのでしょうか。

ホームページ・リニューアル直前リポート（宮腰）

菜の花プロジェクトの進展状況や、チェル救の活動を随時発信すべく、気軽にホームページ更新ができるようなサイト構成を目指して、ただいま、チェル救広報担当の榎本さんや小牧さん・山本さん・黒瀬さんとともに、鋭意リニューアルページを作成中です。

既に、黒瀬さんの「**インターン生とゆかいな仲間たち**」という楽しいスタッフブログが開かれていますが、さらに「**菜の花日記**」として菜の花プロジェクト関連の最新情報を掲載するページを設けて、新鮮な情報を発信していきます。この「**ポレーシェ**」も、ウェブ上で PDF 化、または html 化して、バックナンバーを読める状態にする予定ですので、これまでのチェル救の活動をつぶさに知りたい方は、お読みいただけるようになります。ポレーシェ掲載中の「**河田さんの連載**」と「**竹内さんのウクライナ便り**」については、専用のページを作成しますので、まとまった形で読めるようになります。

年々風化していくチェルノブイリ原発事故についての関心を継続してもらうためにも、これまでチェル救が行ってきた活動をより詳しく掲載し、また、この事故が決して過去の出来事ではないことをより多くの人たちに知ってもらうために、現地の現ｈ状などをできるだけ多く掲載していこうと思っています。原さんが現地で撮影された写真などで構成された「**フォトアルバム**」のページも準備中で、将来的には私が撮影した「**ビデオ映像**」などもアップしていく予定です。

主に携帯電話でウェブアクセスしている人向けの携帯サイトや、この世界的にも意義深い菜の花プロジェクトを広く知ってもらうために、英語やロシア語などの外国語による発信などなど、夢は広がりますが、あまり一度にたくさんやろうとすると挫折してしまうので、一歩一歩できるところからボチボチとやっていく所存です。

ご要望などがありましたら、是非この機会にお寄せください！

連載 66

世界が脱原発に向かうチャンス

――――― 廃炉の時代を迎え 日本も原発にさよならを ―――――

昨年 12 月 22 日、中部電力は「事故続きで長期間運転を中止していた浜岡 1、2 号炉を廃炉にし、新たに 6 号機を作る」と発表した。迫り来る東海地震のための耐震化工事に、巨額の金と時間がかかる事が原因だ。1970 年大阪万博の年に本格的な運転を始めた日本の商業用原発の廃炉決定は初めてだ。6 号機の新設は断念させ、日本の脱原発時代のきっかけにしなければならない。時を同じくして就任したアメリカのオバマ大統領は、新時代に向けてグリーンエネルギーを政策の大きな柱に据えた。

日本は、過去の亡霊である核燃料サイクルに、いつまでも固執すべきではない。

● 今後増加する日本の廃炉原発

浜岡 1、2 号炉と同様の運転開始から 30 年以上経過した原発は、国内で敦賀・福島・島根など 13 基を数える。国は、こうした老齢化原発の補強工事で、寿命を 60 年に延ばしたい意向だが、それは事故率増加との戦いである。チェルノブイリ級の巨大事故に至らなかった浜岡 1、2 号の廃炉は、幸運とすべきだろう。新潟地震で休止したままの柏崎刈羽原発に象徴されるように、過去の耐震設計の甘さが次々と明らかになった今、新たな原発建設には更なる巨額な費用が必要となる。中部電力が計画する浜岡 6 号原発が、計画の 3,600 億円で済むかどうかは霧の中である。加えて、廃炉の費用は全く明らかでない。**廃炉に伴う技術開発自体が未完成**なためである。

● 廃炉がもたらす身近な放射能

廃炉に伴い、放射化した鉄材やコンクリートなど、膨大な量の放射性廃棄物が出る。原発一基あたり数十万トンと見積もられている。これを、全て放射性廃棄物として処理すれば、そのコストだけで原発政策は破綻する。政府は、廃炉に伴う放射性廃棄物を一定レベルで区切り、それ以下は一般ごみとして処分できるよう、基準を設定中である。公園や海岸の埋め立てに廃炉のコンクリートが使われ、家具や鍋釜のステンレス材に低レベル放射性廃棄物が使われる時代も遠くない。**原発廃炉時代は、放射能が我々の生活環境に侵入してくる時代**でもある。また、原発から廃棄される高レベル放射性廃棄物を何処に処分するかは、今後大きな課題になる。国は、原発立地市町村への交付金を、高レベル廃棄物処分場受け入れ自治体にも適用し、廃棄物処分場の確保に躍起だが、現在見通しは立っていない。廃炉の時代は、これまで先送りにしてきた原発の負の遺産をどのように処理するかを、我々に迫る時代でもある。**廃炉に伴う高レベル・中低レベル廃棄物処分のコストが、原発の作り出す電力エネルギーのメリットに見合うかどうかが、真に問われる時代**である。

● 破綻した核燃料サイクル

すでに何度も書いて来たが、原発推進派の主張する「核燃料サイクル」は破綻している。それは、六ヶ所村再処理工場の高レベル廃棄物処分の失敗や、火災で長期間運転中止中の高速増殖炉もんじゅの初歩的な工事ミスによる運転再開の無期限延期など、技術的問題に由来するものではない。そもそも、**核燃料増殖を前提とする高速増殖炉で、核燃料（プルトニウム）増殖が実際上可能となった例が世界的にない**からである。

「もんじゅ」を例にとれば、プルトニウムの倍増時間は 90 年である。90 年運転してやっと一年分のプルトニウム燃料が確保できる計算である。そもそも、「もんじゅ」が 90 年運転できるはずがない。数年前、中部電力の株主総会でこの点を質問された中電浜岡原発所長は、「90 基の高速増殖炉を作れば、一基一年分の燃料が確保できる」と答弁して株主総会参加者の失笑を買った。これは、知的退廃以外の何ものでもない。

原発はこうした幻想の上に成り立っていることを、改めて確認すべきである。　（河田）

竹内さんのウクライナ便り

キエフは、３月下旬に入ってもせいぜいプラス５℃程度の気温、冷たい雨の降る肌寒い気候が続いています。３月 23 日、ウクライナ政府と欧州委員会・欧州復興開発銀行・欧州投資銀行と世界銀行により、ウクライナのガス輸送パイプラインの改修に関する国際会議の結果をまとめた共同宣言が調印され、ウクライナからは大統領と首相が仲よく出席、二人の確執が国内の政情不安定要因となっているという欧米諸国の批判をかわすべく、和やかなムードを精一杯かもし出していました。

これに先立ち３月４日、「ウクライナの国営企業ナフトガス本社に特殊治安部隊が入り強制捜査する」という事態が、マスコミで大々的に報道されたばかり。約８億ドル相当の備蓄天然ガスを不法に管理下に置いた疑いで、ロシアのガスプロム社との契約書類などを押収する目的の捜査だったのですが、この日結局問題の書類は入手できぬまま部隊が引き上げました。この契約に基づいて、「ナフトガス社とガスプロム社の仲介者であるロスウクルエネルゴ社から、ナフトガス社に問題の備蓄ガスを移管する」という決定を内閣が下したのに対し、その合法性に、ロスウクルエネルゴ社の大株主とつながりの深い大統領に直属する治安部隊が疑惑を呈した形で、またしても大統領と首相の間の亀裂を見せつけることになった事件です。今回のブリュッセルでの両者の仲よしムードは、この件でさらに悪化したウクライナ現政権の対外的イメージを修復するための演出であろうと思われます。

しかし、ロシアのプーチン首相は、「このような宣言は、ロシアの立場に対する配慮を欠き、ウクライナに自らのガス輸送システムに対するコントロールを失わせるもの」と激しく批判、数年前にロシア・ウクライナ・ドイツ間で調印された３ヶ国宣言を引き、「ウクライナのガス輸送システムを、ロシア・ウクライナ・ヨーロッパの企業が参入した国際企業連合体が賃借・管理する」という発想に立ち戻るという考えを示しました。これからしばらく、ウクライナ・ロシア・EU 間で、この件に関するつばぜり合いが続くことになるでしょう。

〈ﾅﾛｼﾞﾁ行政庁のｽﾍﾞﾄﾗｰﾅ・ｼｪﾌﾁｪﾝｺさんのｵﾌｨｽ（家庭・児童・青年社会福祉ｾﾝﾀｰ）にﾁｪﾙ救の活動紹介ﾊﾟﾈﾙを持参。〉

話は全く関係ありませんが…ごく最近、日本の精神医学者Ｎさんの通訳を依頼され、ウクライナ精神科医協会の訪問に同行したのですが、この協会の事務所がキエフ市内最大の精神病院の中にあったため、同院の見学にも立ち会うことになりました。この病院はキエフ市の北西、第２次大戦時にドイツ軍によってユダヤ人の大量虐殺が行われた場所であるバービイ・ヤールのごく近く、小高い丘の上にあり、以前そばを車で通り過ぎた際、「こういう隔離環境に精神病院があるのか」と思ったものですが、この時聞いた話によれば、そもそもはロシア革命前、教会（修道院？）に付属した、恵まれない人たちのための病院があったところだそうです。これまでチェルノブイリ救援の仕事で各種の医療施設を訪問した折、「一般病院での経済的困難がこのようであれば、精神病院の状況は推して知るべしだろう」と思っていたのですが、予算不足による治療環境の厳しさは、やはり職員の皆さんが認めておられました。ただ、小児病棟でお話を伺った際、デイケアのための教材などは職員の方々が自腹を切って購入している現状だそうですが、「日本大使館との協力で支援が受けられる可能性がある。大使も関心を持っている由」とのことでした。おそらく「草の根無償支援」プログラムによるものでしょう。

ちなみに精神科医協会で対応してくれた方は、ソ連時代７年を獄中、さらに３年をシベリア流刑で送った過去をお持ちということでした。当時の体制に適合しない思想の持ち主とみなされたためと想像します。　　（３月 25 日）

事務局便り

事務局を席巻した「花粉症」もやっと下火になり、無粋な花粉におさらばして、さて同じ花つながりでも、「桜」というちょっとおしゃれな花でも愛でようかな～、なんて思っていたら大間違い。今度は、事務所に「おお！忙し」が跋扈し始めた。なんてったって、時は４月26日。チェル救春の「大イヴェント」が待ち受けているのだ。２人のイヴェント担当者…事務所の大黒柱候補生・山本さんとインターンを終えた黒瀬さん…が総指揮官。忙しさも、この「張り切りガールズ」とともになら、又、楽しや！ かな。（山盛）

ポレーシェ 109 号（前号）の訂正とお詫び

1．p11 の「竹内さんのウクライナ便り」の左列から右列に移る部分で、写真の貼り付けミスが発生し、以下の下線部分が抜け落ちてしまいました。差し替えをお願いします。
「…バイオガス製造装置を酪農農場に設置しているメーカー（外資系企業）のこともTVニュースで紹介されていました。ふだんは首都の大気汚染を避けるためガスを用いているキエフの火力発電兼熱供給所（集中暖房のスチームや集中給湯のシステムにもつながっている）では…」（以下略）

2．p10 の「連載 66」は、前々号の「連載 65」と全く同じ記事を再掲してしまいました。今号の p10 を「連載 66」としてください。

最近、事務所のパソコンが老朽化した（バージョンが古い）せいか、編集中のトラブルで大苦戦しています。以上２点、訂正してお詫び申し上げます。

編集後記

☆10 年前のスタツアのとき取得したパスポートが間もなく切れる。旅行の予定もないのに一応更新…。いえ腐ってもNGOのスタッフ、パスポートくらいは準備しておくべき。そういえば最後のウクライナ行きは５年前。あ～日本脱出をはかりたいよ～（佳）

☆スリランカに「シーギリヤロック(195m)」という岩山がある。中腹には美しい美女の壁画（シーギリヤレディ）が描かれている。前回は、そこで息切れしてリタイヤ…。しかし、今回は更に登って、王の宮殿があったという頂上の王宮跡にたどり着いた。おおっ～360 度の清々しい世界！ 10 年越しのリベンジに成功したという自慢話でした。（美）

☆（引き続きスリランカ関連）世界三大紅茶・ウバ紅茶の産地。標高 1,700 メートルの‘天空の茶畑’。これ以上の環境があるか！と思われるはるか連なる山やまで、香しい大気と霧雨に育まれ、女性たちにやさしく手摘みされて生まれる。オーガニック･フェアトレードのウバ紅茶は、NPO･JIPPO(京都市)から手に入れられる。（京）

☆アイスランドに続き、ギリシャ・イタリア・スペイン・ポルトガル…そしてイギリス・アメリカと、欧米諸国が国家破産の危機に瀕している。世界の金融・経済は今、$BRIC_S$ と日本、そして新興諸国の支援なしでは、再起不能となっている。オバマ新政権が、自らチェンジしないのであれば、中国やロシアが黙ってはいないだろう。まずは、「国際通貨基金」の改革、「タックスヘイブン」の廃止、「米連銀」の解体、そして「基軸通貨（米ドル）」がその座をあけわたすことになる。いよいよ、本当の「チェンジ」が始まろうとしている。（J）

〒456―0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14
印刷 「エープリント」
TEL・FAX （052）871―9473